

「僕は、おじちゃんじゃないよ」

「ふうーん」

その犬は、よく分からないというふうに、少し困ったような顔をして首をかしげた。

しかし、再びニコニコした目を輝かせて、

「あたいね、ハナっていうの……ね、あっちに行こうよ。みんなと一緒に……」

ハナの促す方向を見やると、白い大きな犬が周りに犬たちを従えていた。

その白い犬は、どっしりとした存在感があり、明らかに他の犬たちとは違って威圧感すら感じられた。

こちらを静かに一瞥し、

……来たければ、来るがよい……

そう言っているようだった。

付き従っている犬たちを眺めていた若犬の視線が止まった。

彼等の中に見覚えのある犬が一頭、こちらを見ていたのである。

体つきは大きい、ちよっとおどおどしたような目つきで、ちらちらと若犬の方を見ている。

若犬が立ち上がってまっすぐに向き直ると、その犬は群れの中から横歩きをするようにヨタヨタと近づいてきた。

若犬は一瞬身構えた。

薄い赤茶色の痩せた胴体に、不釣り合いなくらい大きな三角耳が、歩くたびにパタパタして、相手の様子を窺うように体を横にかしげて歩く。

それは、あの牧場で出会った赤犬だった。

あれから、ムク犬のゴンのところに時々現れては、媚びへつらっていたあの赤犬である。自分がゴンと別れる頃には、姿を見なくなっていた。赤犬は近づきながら、下から見上げるような目つきで、若犬に声をかけてきた。

「へっへっへ……これはこれは、ゴンの親分とこの若さんじゃないすか……いやいや、こんなところで会っちゃまうとは……っへっへっへ……あれ？あれあれ、あれえ？……」

なにやら言いたげにニヤニヤしながら、さらに歩み寄ってきた。

「おひとり……ですかい？ ……親分とは、別々で？ ……ほう、ほう……そうですかい……」

赤犬の態度が急変した。

蔑むようにこちらを横目で見据えながら、後ろの犬たちには媚びているようにも見受けられる。

「俺様たちと来たいんなら、仲間に入れてやらないでもないぜ」

「ほら、あちらにいるのが俺様の親分だ。そして俺はその片腕ってわけよ。へっへっへ……俺が口添えしてやれば仲間入りはたやすいたあ思うが……」

若犬は嫌悪感でいっぱいだった。

年嵩の犬であることが怖くもあつたが、それよりも嫌悪感のほうが勝っていた。

「あ、あっちへ行け……」

「お、なんだとお？ ……おい、小僧……」

若犬は、怖いのを必死にこらえて姿勢を正し、真つすぐに赤犬に向かうと、ジッと眼を合わせて身構えた。

いつの間にか真黒い雲が空にひろがり、辺りが薄暗くなるほどだった。冷たい風が吹き抜けた。

遠雷は、さつきよりも大きくなって響いた。

「僕は、小僧なんかじゃない……あっちへ戻れ」
はじめは若犬を小馬鹿にしていた赤犬も、姿勢を正した大きな犬から直視されると居心地がわるくなり、チラチラと相手の様子を窺うように上目使いで見上げた。

そして若犬が鼻を突き出すと、急に態度がおどおどしてきた。それでも偉そうに上からものを言おうとする。

「な、なんだと……俺様にむかって……」

一瞬、閃光が走り、雷鳴が大きく轟いた。

と殆ど同時に、若犬が飛びかかって赤犬の首に咬みつき組み伏せた。

赤犬は、ひっくり返って背中から倒れ、土埃がたった。

しかし、その場にいた人間たちが走り寄って、棒を振り回して犬の喧嘩を止めさせたので、赤犬はかろうじてその場を逃げ出した。

前庭に人だかりができた。

彼らの視線は、喧嘩をしかけた若犬に集まった。

「この犬、見たことないね。大きいし気が荒いみたいだから近寄らない方がいいよ」

「通報した方がいいよ」

「そうだな」

その時、例の若者が

「いや、追っ払おう……」

「なんで……」

「ここで何か面倒なことはよそうぜ」

辺りは夕暮れのような暗さになった。

そうこうしているうちに、再び激しい稲光と共に雷鳴が轟いた。

人間たちは、犬に構わず、小走りに建物の中へと駆け込んだ。

若者は棒を片手に持つと、静かに黒い犬に近づいた。

「ほらほら、出て行け」

と大きな声で追いたてながら、犬に近づくと小さな声で

「早く逃げな……追いつてごめんよ……悪く思わないでくれな……もう来るんじゃないぞ」

と言いながら、形ばかりの追っ払う仕草をした。

若犬は、シツシツと追われて塀の外に出された。

と同時に、足もとに小さな肉の塊が投げられた。

今度は、若犬もすぐに拾って食べた。たった一口だったが久しぶりの食物だった。

「ほら、おまえらも帰りな……」

ここの常連らしい他の犬達も塀の外に追い出され、少し離れて集まっていた。その中にさっきの愛くるしい笑顔の雌犬ハナもいた。

ハナはこちらを見ている。

……おじちゃあん……

若犬はあのハナという雌犬が気になって眺めた。

……あの仔、なんであんな奴らといるんだ……

再び、稲光が走り、雷鳴が轟いた。

例の白い大きな犬は、相変わらず物静かに一瞥すると向きを変え、先に立って歩き出した。その後を他の犬たちが従って行く。

若犬は、群れの中には入らなかつた。

彼らが去って行くのを見送ると、若犬は、彼らと反対方向に歩きだした。

「自信と誇りを忘れるな」

ムク犬ゴンの言葉が胸に響いた。

頭を高く上げ、胸を張ってまっすぐに歩いた。

「もう、二度と横歩きなんかしないぞ……どんなにつらくてもあんな奴にへつらうもんか……」

若犬は、そう心に決めた。

さらに雷鳴が響き渡り、それと共に大粒の雨が、地面にたたきつけるように降り出した。

若犬の毛皮に付いた雨粒が、キラキラと輝いた。

つづく